

## 2017年（平成29年）

## 4月例会

日時：4月15日（土）14時より

会場：日本女子大学目白キャンパス百年館低層棟1階 104号室

特別講演

講師：東京大学（名誉教授）芳賀徹

題目：徳川から明治へ

—岩倉使節団研究になお残る問題点—

司会：千葉大学 佐藤宗子

## 5月例会

日時：5月20日（土）14時より

会場：清泉女子大学2号館 225教室

①講師：東京大学（院）邵丹

題目：新文体の創出

—藤本和子によるリチャード・ブローティガンの『アメリカの鱒釣り』をめぐって—

司会：日本大学 井上健

②講師：尚美学園大学（非常勤）熊木淳

題目：英語圏およびフランス語圏における音声詩を隔てるもの

司会：日本大学 椎名正博

## 7月例会

日時：7月15日（土）14時より

会場：清泉女子大学2号館 225教室

特別企画 《学術論文・学術書の出版へ向けて》

司会：日本女子大学（名誉教授）ソートン不破直子

講師：千葉大学 西村靖敬

春風社代表 三浦衛

## 9月例会

日時：9月16日（土）14時より

会場：日本大学文理学部3号館 3204教室

①講師：日本女子大学 花角聡美

題目：ジョン・ラスキンの労働観

—『フォルス・クラヴィゲラ』を中心に—

司会：東京大学 佐藤光

②講師：創価大学 寒河江光徳

題目：ダイアナ主題の小説について

—ウラジーミル・ナボコフの「ロリータ」と牧野信一—

司会：早稲田大学（非常勤）高柳聡子

## INSIDE THIS ISSUE

1. 4月・5月・7月・9月例会案内
- 2-3. 例会会場案内
- 4-7. 例会要旨等
8. 東京支部短信

## 幹事会開催のお知らせ

第1回幹事会：

2017年7月例会後、例会会場にて開催します。

（幹事会構成員は、幹事、支部長、事務局長、各種委員会委員長、会計、会計監査です）

## 役員連絡会開催のお知らせ

2017年4月、5月、および9月例会終了後、7月は午後1時より、例会会場にて開催します。

（役員連絡会の構成員は支部長、事務局長、会計を含む事務局委員、各種委員会委員長です。委員会の委員、幹事は含まれませんが、陪席を歓迎します）

## 4月例会会場

日本女子大学目白キャンパス  
百年館低層棟 1階 104号室

〒112-8681

東京都文京区目白台2-8-1

- ◆都営バス「日本女子大前」  
徒歩0分
- ◆地下鉄副都心線「雑司が谷」駅  
3番出口、徒歩8分
- ◆地下鉄有楽町線「護国寺」駅  
4番出口、徒歩10分

目白・雑司ヶ谷駅方面



## 9月例会会場

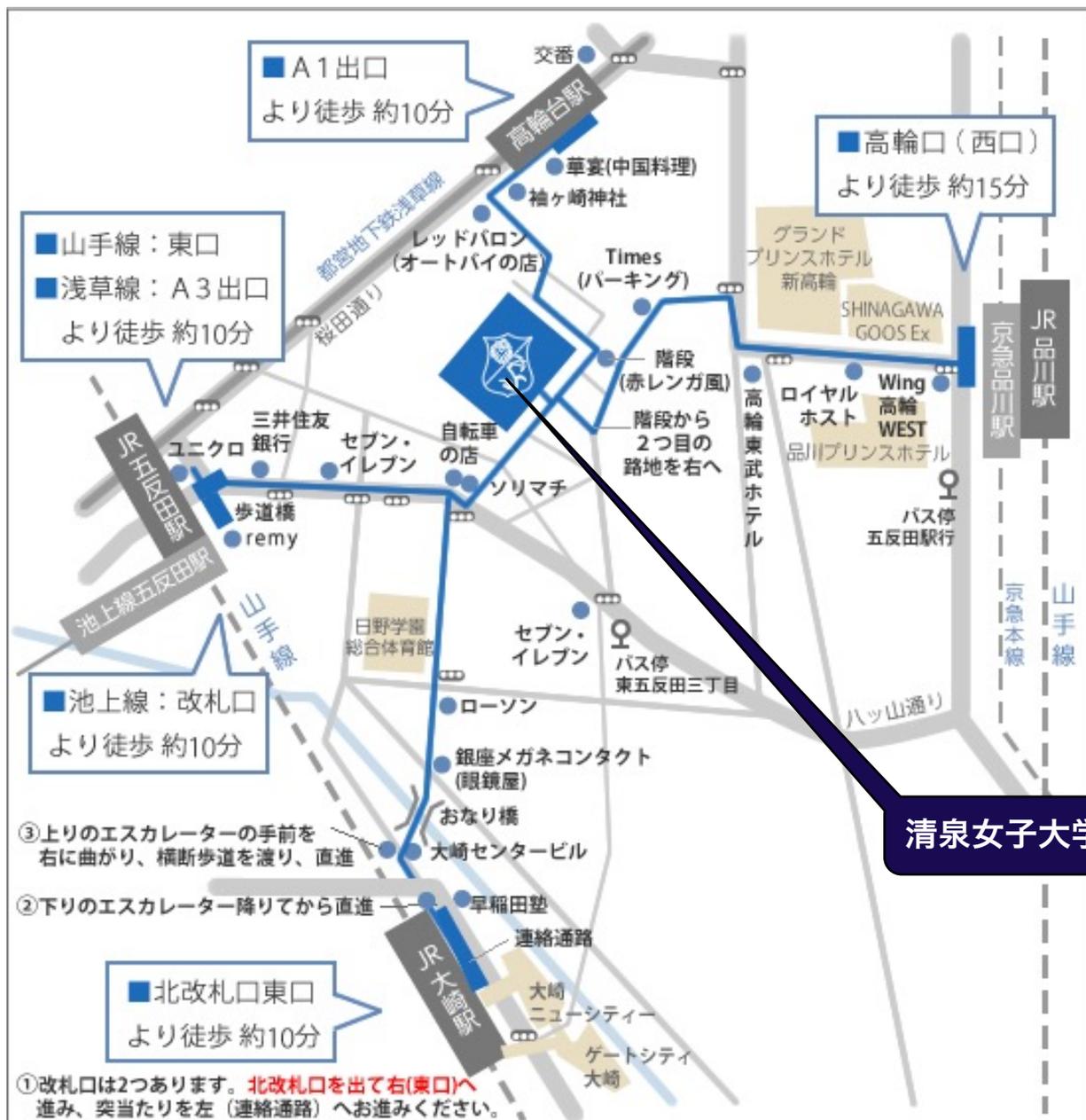
日本大学文理学部  
3号館 3204教室

〒156-8550

東京都世田谷区桜上水3-25-40

- ◆京王線「桜上水」「下高井戸」駅  
徒歩8分





## 5・7月例会会場

清泉女子大学  
2号館 225教室

〒141-8642

東京都品川区東五反田3-16-21

◆ 五反田・大崎・高輪台駅  
徒歩10分

◆ 品川駅  
《五反田行》バス「東五反田3丁目」  
徒歩5分

# 4 月 例 会 特 別 講 演

## 《特別講演》

芳賀徹

(東京大学名誉教授、国際日本文化研究センター名誉教授、京都造形芸術大学名誉学長、静岡県立美術館館長)

## 徳川から明治へ

——岩倉使節団研究になお残る問題点——

### ■ 芳賀徹 著書一覧 (単著のみ)

- 『大君の使節—幕末日本人の西欧体験』中公新書、1968年
- 『大世界史 (21) 明治百年の序幕』文藝春秋、1969年
- 『渡辺崋山—優しい旅びと』(日本の旅人13) 淡交社、1974年 (朝日選書296、1986年)
- 『明治維新と日本人』講談社学術文庫、1980年
- 『みだれ髪系の系譜』美術公論社、1981年 (講談社学術文庫、1988年)
- 『平賀源内』(朝日評伝選23) 朝日新聞社、1981年 (朝日選書、1989年)
- 『絵画の領分—近代日本比較文化史研究』朝日新聞社、1984年 (朝日選書、1990年)
- 『與謝蕪村の小さな世界』中央公論社、1986年 (中公文庫、1988年)
- 『文化の往還—比較文化のたのしみ』福武書店、1989年
- 『岩倉使節団の西洋見聞—「米欧回覧実記」を読む』(NHK 市民大学) 日本放送出版協会、1990年
- 『きのふの空—東大駒場小景集』中央公論美術出版、1992年
- 『詩の国 詩人の国』筑摩書房、1997年
- 『詩歌の森へ—日本詩へのいざない』中公新書、2002年
- 『ひびきあう詩心—俳句とフランスの詩人たち』TBS プリタニカ、2002年
- 『みやこの円熟—江戸期の京都文化史再考』(NHK 人間講座) 日本放送出版協会 2004年
- 『藝術の国日本—画文交響』角川学芸出版、2010年

# 5月例会発表要旨

## 新文体の創出

藤本和子によるリチャード・ブローティガンの『アメリカの鱒釣り』をめぐって

東京大学(院) 邵丹(ショウ・タン)

藤本和子(1939-)は1975年1月20日にアメリカ人作家のリチャード・ブローティガン(Richard Brautigan, 1935-1984)の小説『アメリカの鱒釣り』(*Trout Fishing in America*, 1967)の翻訳をもって翻訳家デビューを果たした。その翻訳を文芸批評家の丸谷才一はいち早く「文章がいきいてる」と評し、「名訳として推奨するに足る」と絶賛している(丸谷才一「ユーモアとパロディで綴る47章」『週刊朝日』, 1975, 106-107)。丸谷はその僅か一年前に戦後の日本語が陥った混乱状態を憂慮し、ベストセラーの『日本語のために』(新潮社, 1974年)を出したばかりであった。このように、日本語に対してきわめて意識的である丸谷からみて、なぜ藤本訳の文章が「生きている」と感じられたのか、また「文章が生きている」とはどういうことなのだろうか。

また、丸谷に「名訳」と賞された藤本訳は読み継がれていっただけでなく(2005年に新潮社から文庫本として出された)、藤本和子によるほかのブローティガン小説の翻訳も日本において定訳とされている。翻訳の傍ら、藤本は文芸誌に紹介文を載せたり、翻訳の最後に長い訳者あとがきをつけたりして、ブローティガン文学の受容に対してきわめて精力的な働きぶりを示していた。さらに、21世紀に入ってから、藤本は集大成的な著作『リチャード・ブローティガン』(新潮社, 2002年)を出し、日本におけるブローティガン再評価の波をつくった。ブローティガン文学が村上春樹や高橋源一郎といった日本現代文学の旗手に与えた影響を考えると、日本における翻訳受容に際して大きな役割を果たした藤本和子の功績は無視できないといえよう。

本発表では、藤本が『アメリカの鱒釣り』の翻訳作業の過程に用いた翻訳ストラテジーを明らかにするために、イスラエルの学者トゥーリー(Gideon Toury)の記述的翻訳研究(Descriptive Translation Studies)の方法論を用いて、細部にわたって翻訳作品『アメリカの鱒釣り』を検討する。なお、分析のプロセスにおいては、翻訳学のシステム理論から「翻訳ノーム」(または「翻訳規範」)の概念を借りて、議論を進める。

---

## 英語圏およびフランス語圏における音声詩を隔てるもの

リチャード・コステラネッツとベルナルド・ハイツィックを中心に

尚美学園大学(非常勤) 熊木淳

本発表ではこれまでほとんど日本で研究の対象となっていない20世紀後半の音声詩について、英語圏とフランス語圏の理論的、歴史的な展開を比較検証したい。音声詩とは20世紀前半の前衛詩を踏まえ、詩の基本要素を声と捉えてこれまでのテキストに依拠した詩のあり方を問い直す試みであると言える。だがその展開は地域や言語圏により多様であり、中でもフランスの音声詩はその特異さにおいて際立っている。

自らも音声詩の作品を制作しているリチャード・コステラネッツ(Richard Kostelanetz)も指摘しているように、20世紀後半の音声詩はそれ以前のダダイスムなどの実践を踏まえて言葉を断片化し意味や統語ではなく、音をベースとした言葉を生み出すことで新たな詩的領域を開拓していった。だがこのことは必ずしもダダイスムが目指していたような「破壊」として捉えられるべきではなく、むしろ英米圏における「リリック」と「ナラティヴ」との対立を前提としてこの事態を理解すべきである。リリックとは詩、韻文を特徴づけるものであり、ナラティヴは散文の謂である。英米の音声詩はこの意味や統語を前提としたナラティヴを徹底的に退けようとしたことによって、詩なるものを破壊することなく、逆説的に詩に近づいていったのだ。

問題なのはこの両者が対立しているという点であり、この点においてフランスの音声詩と対照的なのである。フランスではダダイスムによる破壊をレトリズムが徹底しようとし、それに対するある種の反動として20世紀後半の音声詩が展開していったということが出来る。そしてその反動は言葉そのものを放棄したように見えるレトリズムに対抗し言葉が内包する文字と音との関係を突き詰めようとする傾向を持つのである。具体的には、ベルナルド・ハイツィック(Bernard Heidsieck)を代表として視覚的なもの(テキストあるいはページ)と聴覚的な音声との多様なずれを作り出すのである。フランスの音声詩は音声だけで構成されるのではないのだ。したがって当然ハイツィックに代表されるフランス音声詩はナラティヴを決して排除することはない。このような両者の鮮明なコントラストをいくつかの作品とともに浮かび上がらせていく。

# 7月例会特別企画

## 学術論文・学術書の出版へ向けて

司会：日本女子大学（名誉教授）ソートン不破直子

昨今の日本の高等教育機関における文系学部の軽視、変身、果ては解体という状況は、日本の将来の知の地平から、文系が衰退し消滅するばかりでなく、文系がその核となる精神を支えてきたと私たちが信じる理系・工学系の雄姿も薄れていくのではないかと案じられます。もっと身近な影響として、文系学部の軽視・解体によって、若い文系研究者の就職口は「任期つき」ばかりが増え、腰をすえた長期的な研究には意気阻喪させ、研究発表の機会そのものをも少なくしている状況も見逃すわけにはいきません。

かと言って、日本比較文学会東京支部で何ができる、と問われれば、よい就職口を得る正攻法はよい学術論文・よい学術書を執筆・出版して、その底力ある吠え声を世にとどろかせることだ、としか言えません。負け犬の遠吠えではなくて、どうしたら強い犬になって、この困難を乗り越えていくかを、先輩の学会誌編集経験者や出版業界の理解ある経営者が助言しましょう、というのが今回の趣旨なのです。どうしたら投稿した論文が採用されるようになるかを知りたい aspiring scholar にとっては、テーマの見つけ方、その提示の仕方から文章の稚拙さ克服法など、初歩的なことでも得るものがあると思われまふ。また、博士論文は合格したが、これを学会や広く一般に読まれる本にするにはどうしたらいいのかという学生時代にはあまり実感のなかつた問題に直面した rookie scholar、あるいはもう論文も本も出したけれど、今度は売れる本だ、という established scholar にも、学術書専門の出版社の助言は役に立つかもしれません。

今回は質疑応答の時間を広げるとともに、フロアに先輩研究者を招聘し、応答に、時には質疑にも参加していただく予定です。皆さまの日頃の疑問、憤懣を表明してください。

---

## 第一部 研究論文執筆から出版まで

講師：千葉大学 西村靖敬

2015・2016年度の東京支部編集委員長として『東京支部研究報告』の編集を指揮した経験も踏まえて、研究論文のあり方、応募論文で気付いたことなどを語っていただきます。フロアにお招きした過去の『比較文学』編集長経験者などからもご意見を伺いつつ、質疑応答を続けます。

## 第二部 学術書出版へ向けて

講師：春風社代表 三浦衛

春風社は学術書、翻訳書、写真集、文芸書、哲学書など幅広い分野の出版に加えて、いくつかの大学叢書を手掛け大学出版局の役も担っています。代表ご自身も、生い立ちや出版社設立状況のエッセイ、小説、詩集などの執筆経験も豊富な方で、私たち執筆者の苦労もよくご存知のはずです。講演というよりも、ソートンがお相手をして三浦氏に語っていただくという形式で進めます。対談の後に、フロアからのご質問にも応えていただきます。

# 9月例会発表要旨

## ジョン・ラスキンの労働観

### —『フォルス・クラヴィゲラ』を中心に—

日本女子大学 花角聡美

ジョン・ラスキン (John Ruskin, 1818-1900) は、美術や建築から経済に至るまで、多岐にわたるテーマでの作品を遺した。中でも『近代画家論』 (*Modern Painters*, 全5巻, 1843-60) をはじめとする評論などにより、芸術面での貢献が注目されがちであるが、彼の活動の中で見逃せないポイントの一つとして、「セント・ジョージ・ギルド」の構想がある。この理念・計画は『フォルス・クラヴィゲラ』 (*Fors Clavigera*, 1870-1884) の中で詳細に語られているのだが、この理想郷は最終的に結実することがなく、そのために否定的に捉えられることが多かった。しかし注目すべきは、産業が目覚ましい発展を遂げる真っ只中、機械化や都市化、それに伴う労働状況や環境の悪化への危機感を示した点である。この『フォルス・クラヴィゲラ』は副題に「イギリス労働者・勤労者への手紙」 (*Letters to the Workmen and Labourers of Great Britain*) とあるように、想定された読者層は、おそらく激動の中にある産業を支えていた労働者であり、彼らへの書簡として綴られている。ラスキンが批判的に見ていた19世紀の社会の裏返しがユートピアとしてのギルドであるならば、理想を読み解くことで現実が見えてくるはずである。産業化の先端を走るイギリスに顕在化してきた労働と環境の危機を、「ギルド」という極めて中世的な概念を介して表明しようとした点は、考察に値するのではないだろうか。代表作の一つでもある『ヴェネツィアの石』 (*The Stones of Venice*, 1851-53) にも表れているように、彼にとっての理想であり目指すべきものは中世の社会、そして「ゴシック」の精神だった。理念を掲げるに留まらず、現実の19世紀の労働と環境を中世の精神と対比させることによって、近代性への彼の懐疑の特質を明らかにしたい。

## ダイアナ主題の小説について

### —ウラジーミル・ナボコフの「ロリータ」と牧野信一の「ダイアナの馬」を比較する—

創価大学 寒河江光徳

本報告の目的は、ウラジーミル・ナボコフ (1899-1977) の『ロリータ』 (*Lolita*, 1955) と牧野信一 (1896-1936) の「ダイアナの馬」(初出「報知新聞」1930年10月)の2作品について、ローマ神話に登場するダイアナ (ギリシア神話におけるアルテミス) 主題という観点から比較考察し、その共通性、差異について検証することである。両作品は、ともにダイアナを主題にする点において共通する。本報告では、この2作品を比較し、神話のモチーフが改変され小説という完成体になるまでの過程の違いについて着目したい。一つの神話的挿話が骨組みを変えていくことによって小説という完成体への姿形を変えていくプロセスは、ポール・リクール (Paul Ricoeur, 1913-2005) の『時間と物語』 (*Temps et récit*, 1983-85) において定義された「三重のミメシス」によって説明することが可能である。リクールによれば、神話の中の素材が先行理解として存在し、それが筋に編成、テキストとして形象化され、さらにそれが再形象化され、テキストを一つのまとまりをもったストーリーとして実現化される。ナボコフの場合、ロリータを誘惑するハンバートが実はクレア・キルティの罠にはまってしまうという筋であるが、最後にハンバートが復讐にキルティを殺すという物語である。「追う—追われる」、「術中に嵌める—嵌められる」という仕掛けが幾重にも張り巡らされる。一方の「ダイアナの馬」では雪子が愛馬であるドリアンが村長の家に売られるという挿話が、実は雪子自身が村長の息子の嫁に嫁ぐことの暗喩となっており、最終的には、その家から飛び出していく様子が語られる。2つの作品はもちろん全く異なるものだが、一つの神話的挿話が、2つの全く異なるプロットに発展する様子を比較しながら、原作がさまざまな物語に姿形を変容 (transfigure) させる様子について考察したい。

## 東京支部次期役員選挙の結果

2016年10月16日、東京支部大会の会場にて次期役員（支部長、幹事、会計監査）選挙が行われ、その結果、ソーントン不破直子氏は次期支部長として選出されました。また、同日に開かれた総会において、ソーントン氏より当日の幹事会の議を踏まえて、次期事務局長候補として椎名正博氏が提案され、承認されました。選挙で選出された次期幹事、会計監査は下記の通りです（敬称略）。役員の任期は2017年6月より二年間です。

【幹事】 笠原賢介 加藤隆 金田由紀子 亀井伸治 近藤圭一 佐藤宗子 戦暁梅 銭国紅 高柳聡子  
堀啓子 増田裕美子 前島志保 南明日香 宗形賢二 山田潤治

【会計監査】 高山茂 田中徳一

## 第55回東京支部大会研究発表者募集

2017年10月15日（日）、日本女子大学目白キャンパスにおいて、第55回東京支部大会が開催されます。研究発表を希望される方は、氏名、住所・連絡先（電子メールアドレス）、所属、及び、発表題目、400～600字程度の発表要旨をメール添付で、5月27日（土）必着で事務局（sen.g.aa@m.titech.ac.jp）までお知らせください（郵送も可）。発表時間は25分、質疑応答が10分です。なお、申込み受付の返信をお送りしますので、ご確認ください。

## 電子版『日本比較文学会東京支部研究報告』への投稿について

電子版『日本比較文学会東京支部研究報告』は、原則として毎年一回、11月末日に発行されます。研究論文の投稿資格を有する者は、本学会員で、前年および前々年に開催された東京支部例会または東京支部大会において研究発表や講演を行った者としてします。投稿論文の提出期間は8月16日から8月31日までで、送付先は下記の通りです。

日本比較文学会東京支部編集委員会委員長 西村靖敬 nishimur@faculty.chiba-u.jp

詳しい投稿規定および執筆要領、投稿用のテンプレートは東京支部ホームページに掲載されていますので、どうぞご覧ください。ご質問がある方は支部事務局に電子メールでお問い合わせください。

## 月例会発表者募集

支部月例会の発表者を募集しています。申し込みは支部事務局（sen.g.aa@m.titech.ac.jp、6月18日以降はshiina@chs.nihon-u.ac.jp）に氏名、所属、題目、連絡先（メールアドレス、電話）を明記したうえで、600～800字の要旨を添えて電子メールで送信、または郵送でお願いいたします。支部役員に託されても結構です。発表時間は45分（質疑応答を除く）です。

## 第79回日本比較文学会全国大会の宿泊について

2017年6月17日（土）、18日（日）に第79回日本比較文学会全国大会が山形大学で開催される予定ですが、ホテルなど宿泊施設の予約が取りにくい可能性があります。ご参加予定の会員におかれましては、なるべく早く予約されますよう、ご案内申し上げます。

## 日本比較文学会東京支部事務局移転のお知らせ

このたび、日本比較文学会東京支部事務局長の任期満了により、2017年6月18日より椎名正博氏（日本大学文理学部）が新事務局長に就任し、それにもない、東京支部事務局が日本大学に移転いたします。

つきましては6月18日以降、月例会、東京支部大会発表申し込み等のご連絡は下記のところをお願いいたします。

〒156-8550 東京都世田谷区桜上水3-25-40

日本大学文理学部 総合文化研究室 椎名正博研究室

TEL/FAX: 03-5317-9715 / 03-5317-9424

E-mail: shiina@chs.nihon-u.ac.jp

## 日本比較文学会東京支部ニューズレター 121号

発行人：ソーントン不破直子

編集委員会（編集担当）

委員長：西村靖敬

委員：佐々木悠介 高柳聡子 永井久美子 信岡朝子 堀江秀史

事務局（発送担当）

事務局長：戦暁梅

事務局委員：市川しのぶ 大澤絢子 近藤圭一 鈴木美穂 田村斉敏

土田久美子 芳賀理彦 畑中健二 福島君子 蒔田裕美

## JCLA

## 日本比較文学会東京支部

事務局住所

〒152-8552

東京都目黒区大岡山2-12-1-W3-29

東京工業大学リベラルアーツ研究教育院

戦暁梅研究室

TEL/FAX: 03-5734-2666

E-mail: sen.g.aa@m.titech.ac.jp